

桜花と青花からへことばの数珠玉へ

大掛史子第七詩集『桜鬼』に寄せて

1

一人の詩人には秘められた花がある。その花は幼少期に出逢った美意識への象徴のようなものかも知れないし、決して譲れないその詩人の生存の核のようなものだろう。詩人の宿命はその花を語ることよって浮き彫りにされる。そんな詩人を生み出した花の存在に私たちは魅せられるのだろう。

大掛史子さんが心に秘めて語りつづけてきた花は桜であり、また花菖蒲などの青花だ。そのうちの桜は古来から西行を初めとして多くの文学者よって愛でられ、詩に詠われてきた花だ。大掛さんの新詩集『桜鬼』には「はなおに」とルビが振られている。大掛さんは桜を愛する人間の奥底に潜む鬼の存在を直視しようとしているのだろうか。従来桜のイメージを打ち壊してしまう謎を秘めたタイトルに驚かされる。後で触れるように大掛さんは、このテーマを四十年近くも温めてきたようだ。画家の山本蘭村からいつか詩集の表紙画にと、手渡された絵を大掛さんはそれに相応しい詩が書けるまで、自己の課題として眺めて慈しんできたのだろう。そのひとつの行為をとってしても大掛さんの原点を忘れない詩的精神の

在り方がわかる。

詩集に触れる前に私が大掛さんに出会うきっかけになったことを記しておきたい。鳴海英吉は二〇〇〇年八月三十一日に亡くなり、お通夜・告別式が九月一・二日に佐倉市の斎場で行われた。私は受付をしていたが、その時に初めてお会いしたのだった。一九八七年から鳴海さんの家に入りしていた私は、隣接する山武に大掛史子という詩人がいて、鳴海さんの話の中でも信頼している詩人であることを分かっていて、お通夜・告別式が終わわり、ほとんど全ての詩人たちは帰ったが、私は親族と一緒に火葬にも立ち会い、大掛さんも残られたのだった。私は戦後詩を切り拓いた偉大な詩人の最後を見届けたかった。大掛さんと私は鳴海さんのお骨を箸で挟み骨壺に入れ、鳴海さんの冥福を祈ったのだった。斎場内のお清めの席上で、私は奥様や二人の息子さんに、『鳴海英吉全詩集』をらせて欲しいとお願ひし、了承をいただいた。その時の場面を大掛さんは側で見守っていてくれた。

戦前から詩作を開始し少部数の手作り詩集を数多く出し続けていた鳴海英吉の全貌は、誰もまだ知らなかった。私はこの全貌を伝えれば、シベリヤ抑留者の詩では石原吉郎が有名だが、死んでいった多くの兵士の真実と内面を語り継いだという点において、鳴海英吉が石原吉郎よりもっと優れた詩人であると明らかにできると確信していた。またその他の戦後の膨大な詩篇の多彩な豊かさを伝えなかった。私は鳴海英

吉の詩群を後世に残すためなら、一編集者・解説者になろうという使命感を抱いた。『鳴海英吉全詩集』は「鮫」の芳賀章内氏、「炎樹」の佐藤文夫氏、「光芒」の大掛さん、「COAL SACK」の鈴木が編集委員となって、二年後の二〇〇二年八月三十一日に刊行された。その牽引役の隠れたキーマンは、大掛さんだった。私が年譜や解説の作成に専念できるように、全詩集の広報役と販売に力を注いでくれた。また、鳴海さんの奥様への気遣いや全体的な編集の方向性の調整役であり、校正などにも力を注いでくれたのだった。その全詩集の刊行された命日に、関係者で鳴海さんの墓参りをしていたが、途中で連絡が入り母のかつ子さんが亡くなられたことを知った。大掛さんは、母のかつ子さんが『鳴海英吉全詩集』の刊行に携わること深い理解を示していたことを伝え、私たちに気を遣わせない言葉を残されて帰宅されたのだった。その後も毎年続いている『鳴海英吉研究会』の中心メンバーとして活躍してくれている。

新詩集までの六冊の詩集を紹介しながら、大掛さんの『桜鬼』に至る軌跡を辿ってみたい。大掛さんの第一詩集『三月の雪』（一九六九年刊）は表紙カバーと見返しに和紙が使われている。その和紙には雪の結晶のような模様が施されている。十篇の詩「亡父へ、三月の雪、弟に、山になったひと、奥秩父雁坂峠への夜、北八つ岳、樹に、さくら、書物、中国古陶三題」が収録されている。一九六九年の二九歳の頃で、名

前は結婚前の古川史子と記されている。冒頭作品「亡父へ」は大掛さんが自らの宿命を直視しようと決意した記念すべき作品である。この十篇は『戦後詩大系IV』（三一書房、一九七一年刊、嶋岡晨・大野順一・小川和佑編）に全て再録されている。処女詩集としては詩的精神の豊かさや作品の完成度の高さを評価されて収録されたのだと思われる。

亡父へ

あなたへの

ながい遍歴の旅にすぎなかった

日ごと わたしを灼き

ほのおの夏にかえっていった男たちのかげ

そのかげへのおもいは

あなたのわだちが

こんなに素肌をよぐすので

わたしは いまだに

あなたの軌跡から

のがれることができない

ひたいにうけた

あなたのしるしが

いつか

裸身にそってながれだすので

わたしは

わたしのおんなをからみとることができない

あながい歲月

暗いあこがれにのたうって

身をなげる淵はいつも

あなただった

あなたというおもい深淵

あなたというはてない原野

わたしもいつか

ずつとずつとおもくなり

おもたいままにわたしをけずっていくだろうか

けずられたわたしが

やがてふかい穴となり

あなたの淵にゆきついてしまうまで

そのとき

わたしはまぎれもなく

あなたからはいずりです

多作した。昭和二十四年（一九四九年）没』

この古川眞治が大掛さんの父であった。経歴や大掛さんからお借りした資料・作品群を読んでもみると、父は学生時代から筆一本で生活をしており作家を天職と考えていた人物であった。それも戦前・戦後を通じて大衆小説家達の若きリーダーであったことが、批評文や亡くなった後の同時代の作家の評言からも裏付けられる。幕末もの、浅草ものが得意で市井の人情、ジャズ、スポーツ、武道、芸事にも通じていた。山の手育ちだが、下町の庶民の暮らしにも詳しくかった。戦争中は飛行機の性能、操縦方法、飛行士の心理面などの細部を描いた航空小説も書いた。戦後も浅草に集う人々をいち早く書き始めていた。その人柄は多くの仲間から愛されて、死後も幾つもの雑誌で追悼特集が組まれて才能が惜しまれていた。しかし五人の子供を残して、長女の大掛さんが九歳の時に四十一歳で肺を悪くして亡くなってしまった。残されたかっ子夫人は女手ひとつでの生活や子育てにどんなにかご苦労されたことだろう。

「おもい深淵」とは父が抱いていた文学的な精神であったろう。「はてない原野」とは、父が試みていた新しい文学だったかも知れない。それから逃げることなく、自分は文学の道に進むのだという、どこか気負いも感じさせるが、自分の運命に立ち向かっていく誠実で清々しい詩であると私は感じた。「おもい深淵」という文学的な情熱を背負い、いつか父という

この詩を読めば、大掛さんが父を恋しがる娘としてのその想いを述べた単純な詩ではないと感じられる。父の血から逃れることができないと、悟ったことから自分の出発を誓った詩ではないか。「ひたいにうけた／あなたのしるし」や「あなたというおもい深淵／あなたというはてない原野」と語れる娘はめったにいないだろう。父が志してやり遂げたこと、やり遂げられなかったことを直視して、どこかで担っていかうとする胸に秘めたひたむきな情熱を感じさせられる。父を見据えてその課題を自分なりに背負っていかうとする決意表明がこの詩や、この第一詩集の意味だったのではないかと思われるのだ。

『大衆文学大系29 短篇上』（講談社、一九七三年刊、尾崎秀樹・和田芳恵・中島河太郎編）に短篇「開化チャリネ囃子」が収録されている番仲二という作家がいた。略歴を引用してみる。

《番 仲二 明治四十一年（一九〇八）十一月三日、東京麹町に生まれた。本名古川眞治。立教大学史学科在学中の昭和六年、「サンデー毎日」の懸賞（「大衆文芸」）佳作入選、以後作家生活に入る。同九年、サンデー当選者の同人誌「新興大衆文芸」を発刊、編集委員をつとめた。早くから長谷川伸に師事、筆名も伸の二代目を意味したといわれるが、ひところ純文学に転じ、戦後大衆文学に復帰、本名で現代風俗小説を

「あなたからはいずりです」ことを自分の人生の目標にしよう」と決意したので。それほどまでに父にこだわっていた大掛さんは、この詩集によって実は父を客観視しうる年齢になったことを認識したのでだろう。その詩を冒頭に掲げたことは、文学に命を捧げて燃えつきてしまった父への複雑な心情を整理しなかったのだろう。それを「ながい遍歴の旅」を経てといい、自分の奥底にも眠っている父と同様の「おもい深淵」を詩行として表現せざるを得なくなつたと告げているように私には思われる。

さくら

冬枯れの小枝の かほそい端々まで いつかうす桃の血は
ながれ ふいに浅い春の ふるえているつめたい枝先から
ほのかな淡紅がのぞく やがて始まるあでやかな葬列の
ための序曲 くるおしいふりをして しめった水いろの空
いっぱい かきひろげてみせる脆いのちをあれは美しい
喪のいろだと いいも得ないころを嘲って 撩乱と三日
の春を染めながら ひたすら土に抱かれる日を待ちのぞむ
うす桃の花房に触れた手もないまま 南の風の吹きつる
ひと夜 花あらしとなって 大地の母の胸に還る花びらの
こどもたちに かたちばかりな淡紅の遺文などもたせる
のも 散りがてに残していくわかみどりを いつくしむた

めにほかならぬのに

小説家大岡昇平の著書に『少年』（筑摩書房、一九七五年刊）という自伝がある。その中で「古川の家の前に桜の木があったことは前に書いたが、横丁には入口からずつと染井吉野が並んでいて、桜横丁と呼ばれていた。」と記している。青山学院中学部で大岡昇平と古川眞治は親友だった。二人で同じ女性を好きになり古川が勝ったときにも、「恋仇であつても、私は彼を憎めなかつた」といい友情は壊れなかつたという。大岡昇平は、今の渋谷区宇田川町附近でその頃の三人の家の所在地を入れた地図も本の中に掲載している。その地図や大岡昇平の言葉から古川家の前の道は桜横丁と呼ばれていて桜の並木だった。このことから大掛さんは幼少の頃から桜の樹を眺めて暮らしていたことが分かる。桜の樹の生命が家族の命のように感じられているのだろう。花びらは父であり、華やかに咲き誇っていたのだ。しかし九歳の少女の前で父は散って逝ってしまったが、その「あでやかな葬列」や「脆い命」の後に、「わかみどり」である自分たちの存在を見守る父の愛を桜の花びらのように受け止めていたのだろう。大掛さんにとつての桜とは、父であり、母であり、家族であり、そしてその命を引き継ぐ自分という存在なのかも知れない。そんな思いを感じさせてくれる「さくら」という詩だ。「大地の母の胸に還る花びらのこどもたちに かたちばかりな淡紅の遺

命的な執拗さ」を温かく洞察していた。大掛さんは桜と同時に露草のような青花に心惹かれ、詩集タイトルの「青のうらみ」では、「魂鎮めの青さ」とさえ言っている。

青のうらみ

——染色用青花のために

張りつめた 泥白の布のおもてを 濃く 淡く
ひろがり走り ひややかに したたかに
じむ 水辺のつゆくさの 魂鎮めの青さよ

蘇芳 藍 茜 紫 鬱金 紅

予感にみちて まぼろしの彩色をまさぐり
無に はじめて かたちを与えるおのきも
触れれば あとかたもなく消えてしまふ
水のほのお

辻が花 唐草 友禅 花更紗

ひたすらに 溶けてゆくばかりの 身をなぞ
らせ 埋み火の上に 現れいでた 文様の
咲きみつ花野を ついに 踏むすべなく か

文などもたせるのも 散りがてに残していくわかみどりを
いづくしむためにほかならぬのに」という最終連は、桜に宿る連綿と続く命を大掛さんが内面化しているのが強く感じられる。桜花の儚さが、逆に桜の強い生命力と美しさを示しているように思われる。大掛さんは父とは少しの触れ合いしか持てなかつたが、桜の花びらを見るたびに父の深い愛を感じ、桜樹の存在を感じることで助け合つて成長した家族の愛を意識してきたのかも知れない。桜によって自分たちが守られていると感受してしまふのだろう。

2

第二詩集『青のうらみ』には一六篇の詩が収録されていて、「幻視者」同人だったからか「幻視者社」が発行所になっている。第一詩集から一二年後に出されたものだ。その間に結婚されて現在の大掛史子となっている。跋文で新川和江さんが大掛さんの詩の特徴を詩句の中から取り出し（ことはの数珠玉）と指摘して、次のように書いているのが印象的だった。「業という言葉を私はあまり好まぬけれども、史子さんの血の中には、やはり言葉を表現の道具とされた、作家である亡き父上の血が、さらに煮つめられ濃度を増して享けつがれており、それはもう業としか呼びぶようのない宿命的な執拗さで、日夜、史子さんを、言葉の探索、捕獲、錬磨へと駆りたててやまなかつたのであろう。」と大掛さんの詩的精神の「宿

き消えた 青いうらみ それでも 染めの花
むらが ふつと 日差しを失なうとき つゆ
くさの面ざしのまま 佳人のたもとを たゆ
たいよぎる ひとしづくの 青い火

「うらみ」とは他者や運命への「恨みや怨み」ではなく、内面的な「憾み」のことだろうか。果たせなかつた願いを胸に秘めて、その「泥白の布のおもて」に花から採った色で染めていく行為が、自らの詩作とも重なってきたのだろう。多様な花のそれも青系の花々に惹かれている大掛さんは、「魂鎮めの青さ」といい、父への鎮魂に青が相応しいと選び出す。しかしながら青は「蘇芳 藍 茜 紫 鬱金 紅」へと紫から紅へと諧調をなしていく。この世の移ろいを色彩に託して、魂を鎮めているのだろう。大掛さんにとつて、色は自分の魂を奮い立たせる必要不可欠なものであり、父を含め死者の魂を慰め鎮めるものなのだ。その意味で「恨みや怨み」を昇華するために、自己の魂の在りかに潜む「憾み」が求められるのだろう。「ひとしづくの 青い火」とはその魂の奥底に、一見醒めているかのような静かな情熱を現しているのかも知れない。

大掛さんの詩句の連なりは美しい調べを奏でているが、その調べは「青いうらみ」によって促され、あたりを掻き乱していき、青すじがたち、血が吹き出てくる。その果てにくっ

きりとした「青い火」のような情熱が熾つてくるのが大掛さんの詩的精神なのだろう。

唐三彩と志野

あなたは唐三彩のゆらめく炎
わたしは志野碗の雪のくぐもり

陳列棚のガラスを隔て
端座して互いを感じとりながら

なお言葉をさがしあぐねて

ひたすら日と月をかさねておりました

どうして知り得たでしょうあのころ

そんなにも耐えがたいあなたの渇き

三彩の飢餓の火のはげしさを

ふいに雪のおもてを舐め襲い

志野碗の在り処のすべてを

ひとしづくの水に変える火柱を

それでも

みずから三彩のるつぽに身を投じ

火炎の鎮まりを見届けたあと

冷やかに水をたたえて

残り火をみつめていたのは

あさぼらけの雪の余映でもあったでしょうか

確かめようとすれば

起きがての夢よりもはかないのに

やっばり

あなたは唐三彩のゆらめく炎

わたしは志野碗の雪のくぐもり

大掛さんは結婚をされ、文学者の父とは異なるタイプの技術者である伴侶を得た。夫を「唐三彩のゆらめく炎」に例え、自分を「志野碗の雪のくぐもり」に例える。唐三彩とは中国の唐時代に作られた陶器で、鉛釉を掛けた上に、酸化銅、酸化鉄、酸化コバルトなどによって、緑、褐色、藍色などの発色を得る色彩豊かな陶器だ。白、緑、褐の三色のものが多いらしい。大掛さんは夫の奥底に父と同様に自己の運命を生き急ぐような激しい情熱の炎を見ていた。一方、志野の素地は白土で厚手に作られ、淡雪のような白い半透明の長石釉が厚めにかかっているという。肌には小さな穴がある。ところどころに火（緋）色の赤みがほんのり出ている。特筆すべきことは、志野焼では釉の下に鬼板（酸化鉄）で絵付けするという、かつて見ない文様装飾の手法が編み出されたことだといわれている。

大掛さんが自分の存在を「志野碗の雪のくぐもり」に例えたことは、自分がそんな激しい生き方をする存在の傍らにいたに違いない。〈ことばの数珠玉〉である詩を書き続けていくとする女性にとつて夫の理解は不可欠だが、このような価値観の違いを埋められることがない困難さが、きつと多くの詩的・文学的才能ある女性詩人を失望させ苦しめてきたのだろう。

冬ざれの野面の

かすかなひとすじの風のみちに立つとき

いつも執念くいざなうものを忘れはしない

さぐりあつめることばの数珠玉は

くろくろと掌に充ちても

つなぎとめる糸を失なつて久しいのに

(略)

——詩がこれまで

何かに貢献したことがあるのか

世界第二位のGNPのおかげで

競つて体裁ばかりの詩集を出し

職場や企業を食いものしているひと群

そのGNPを支えてきたのは

詩人なんかじゃない 俺たち技術屋だ

ひとしきり荒れつり冬野を駆けた北風は

やがて背を向けて軒をかきはじめた

夫の肩に吹き取められていく

のではないかと思われる。

しかしいかに尊敬の念を抱いても譲れないところを大掛さんは次のような詩「枯野」で記している。それは夫の言葉であると同時に、文学の価値を否定するビジネス社会の男たちの経済至上主義の本音やその肉声であったろう。詩を必要とする人間を理解しようとしなさい、精神の貧困に追い込まれたビジネス戦士の疲弊した言葉を代弁するものとして書き留め

第三詩集『ビジネス戦士と葛』は一九九一年に十年ぶりに出されて、一六篇の詩が収められていて「幻視者社」から発行された。白い和紙にグレーの筆文字が書かれただけのカバー表紙だ。どこか遺稿集のような削ぎ落としたようなシンプルさだった。詩集タイトルの詩は何かただならぬ悲劇を予知しているかのような異様な張りつめたものを感じさせる。

ビジネス戦士と葛

ビジネスの戦場で斃れかけたとき

男は田園に土地をもとめた

地目山林二百坪は鬱然たる檜の林と

湧き水を引いた田に囲まれ

流れはひいやりと男の傷を洗った

週末ごとに都会の戦場から帰ると

男は渾身の力で鍬をふるい

土地いっぱい縦横に張りめぐらされた葛の

剛毛におおわれた十メートルにも及ぶ蔓と

地中深く岩のような木部と化した根に挑んだ

鍬の刃も受けつけず執拗に地にくいこむ根が

蔓ごと鋸で切られ投げ出されると
強烈な葛粉の匂いを放ちながら
ぶるんと地をのたうって葛は息絶え

花と葉と莢をつけたまま葛の骸は山をなした
葛を根絶やせば後の雑草は物の数ではない

明るく開墾されたおのが土地に元気づけられ

男は再び戦場に戻るのだった

次の週末土地を訪れると

地中に残った根から鎌首を持ちあげ

葛はまたも延びに延びて蔓延していた

再び打ちおろされた鍬の刃は

男の内なる巨大な葛根かつこんにくいこみ

いつしか彼は

自らを蔓延してやまぬものに挑んでいた

己れに打ちこんだ刃の重みを確かめながら

いまも男は戦場と葛の地を行き来している

夫がビジネスの戦場から疲れて帰って来て、プライベートにおいて葛と戦う様は壮絶な光景だ。「再び打ちおろされた鍬の刃は／男の内なる巨大な葛根にくいこみ」と語り、夫の悲劇を察知するかのような大掛さんの透視力を感じる。この詩集が出た半年後に夫は病死してしまう。父と同様に夫も若くして見送ることになった大掛さんは、競争社会で責任ある

花吹雪

純白の大島桜がすきでしたね 薄紅色の染井吉野は気分に欠けると 大島桜は みずみずしい若みどりの葉を伴って 大ぶりの白い花を緻密につけた花房を 一斉に 咲き展げて惜しまないので この庵の窓からは 小川と田んぼを隔てた向こうなのに 古木が 幾本も重なっているからなのでしよう そこだけ 淡雪をまとったように しろじろと寂しくて

あれは にわかに風の吹きつった昼下りでしたね
花びらという花びらが すべて 樹を離れ立ち 春の陽にきらめきながら 狂おしく舞い乱れ 乱れ昇り おののき流れて 視界を ただ 花びらの吹雪の中に閉じこめたのは

吹きまどう白い言葉は この世のほかからもたらされた
神のおたけびだったのでしょうか あまりにも 美しく
気高く 奪いつづけてやまぬものの中で 竹ちつくしな
がら 恐れと いわれのない悲しみを共有していたのでし
たね けれど 雪白の言葉に いちはやく呼応して 安ら
ぎの御手に はやばやと まだあり余る月日のすべてを委
ねたのは あなただけでした

立場に生きる男の業のようなものを見ていたのだろう。それを妻であったとしても止めることが出来ない、どうしようもない立場・価値観の違いを見ているかのようだ。あたかも母が父の文学的な情熱を止めることができなかつたように、大掛さんも次世代の石油化学製品の開発技術者である夫の業を変えることはできないと分かっていた。分かっているにもかかわらずできないことがあるということが大掛さんは誰よりも知っているのだろう。この詩の異様なただならぬものとは、悲劇を見詰める悲劇の予知に人が耐えなければならぬことを主題にしていることだろう。

第四詩集『あふれ寄せる光の潮で』は一六篇の詩が収録され一九九四年に発行された。夫のことを書いた「樹に、唐三彩と志野、ビジネス戦士と葛」の三篇が再録されている。カバー表紙には「大掛亮次追悼詩集」と記されており、夫の死後三年半を機に出されたことが分かる。夫の愛車で夫の亡骸を病院から引き取る詩「廃車」や夫の日曜大工道具を使いこなししていく、夫の心を感じていく「引き継いだ日曜大工」などが秀逸だ。その中でも次の詩「花吹雪」が大掛さんの奥深いところで大掛さんの言い知れぬ困難さを掬い取っていったように思われる。

今年も 日ごとに 枝々の先から 白い時間が広がりはじめ もうまもなく 純白に匂い立つ姿を 惜しげもなくさらしてくれるでしょう この凜と白く気高い大島桜と かれんな江戸彼岸が あの あでやかに弥生の空を鎮する 染井吉野の 父と母だったことを知ったのは あなたが 花吹雪の中に 隠れ消えてまもなくのことでした

桜について大掛さんが夫と語り合った時間が反復される「花吹雪」という詩は、伴侶を失ったにもかかわらず、豊かな時間となって私たちに桜に仮託された愛を感じさせてくれる。生家の前に咲いていた染井吉野は大島桜と江戸彼岸によって生み出されたことを知ったのは、夫が亡くなってからだという。その大島桜が好きだった夫の感性をまた大掛さんは、誇らしげに語り、染井吉野の背後に透視しているのだろう。大島桜の白い花びらを「白い言葉」と言い換えて、「純白に匂い立つ姿」である夫の姿を思い浮かべているのだろう。最愛の人を悼む気持ちを大島桜に読み込んだこの桜の詩が、大掛さんの生涯の主調音となって読むものに鳴り響いてくる。「吹きまどう白い言葉」は夫の言葉であると同時に、父やその他の心に残る人々の言葉となり、またそれらを全て抱えながら「神のおたけび」として大掛さんは受け止めるような心境になってしまう。きっと大掛さんの中で桜を愛する多くの人々の言い知れぬ思いが自らの生涯のテーマとして姿を現し始めたの

かも知れない。

5

追悼詩集を出してから四年後の一九九八年の第五詩集『丘の教会』は、画家をテーマにした作品が多く並んだ一五篇から成り立っている。大掛さんは画家の表現者として命を賭けて自らの作品を問い詰めていく姿勢に共感し、画家そのものを詩作していく。

田中一村「奄美の杜」が招ぶ

あなたが最晩年を預けた画譜の中から
奄美の神々の声が聴こえる

ピロウ樹のおどろな葉の向こうにも
ブーゲンビリアの紅紫の花房の間からも
アダンの巨大な金いろの背後にも
必ずのぞいているあなたの内部の静謐な海
奄美の森の陋屋で極限を生きながら
己の良心を納得させるためのみに
ひたすら美に真向かった魂が
私の日常に激しい揺すぶりをかける

荒々しく炎え翻る雲の金泥
袖工場で得た労賃の大方を投じ

一切の虚飾を捨てたあなたが必要としたのは
画材を買う代金だけだった
下着一枚で絵筆をとる遺影の
双眸は鋭くこの上なく清らかだ

アカシヨウビンを配して描いた
雪白のらっぱをつらねて奏でる
亜熱帯の花タチュラの音階は
原初の自然へのあなたの叫び
杳い森の奥へと私の未来を引き摺んでいく声

原色の蝶たちの羽の震え
瞑想するトラフスクの神秘の表情
美神へのひたむきな祈り
その祈りの清冽な響きが
私の時間を洗いたててやまない

生ま生ましい自然と内奥の深みを
見事に統合させたあなたの絵筆
美に殉じた鮮烈な証しを前に
私の言葉たちは

外と内との安易な接点で蠢めきながら
いま言いようのない羞恥にさらされている

田中一村の絵画に魅せられる人は多いが、大掛さんはその絵を見詰めていると、「言いようのない羞恥にさらされている」と語っている。一村の妥協のない日本人離れをした絵画や生き方に、大掛さんは共感するというよりも、羞恥心で射すくめられ、畏れおののいている。それは父や夫と同じように命を賭けて人生を突き詰めていき、自己の表現に殉じていく芸術家の美神や仕事への情熱こそを、大掛さん自らの詩の中にも宿したいと強く感じ始めたからだろう。生きることを芸術化する人間たちこそ大掛さんにとって最も親しい関係であったからだ。そのために多くの絵画や芸術と触れ合っている、魂を太らせていった。優れた詩を読むように他の芸術に潜む、詩的精神を探し続けていった。田中一村のような突き詰めた芸術家に向き合うことによって、新たな詩作に挑んでいたのがこの詩集だった。父という「あなたからはいずりである」ためには、それに見合う時間が必要だった。夫が挑んだ「巨大な葛根」を冷静に見るためには、それに匹敵するキヤンパスが必要だったのだ。大掛さんは二人の喪失感を大いなる芸術精神へと昇華していった。田中一村への細部を語っていく詩行は、田中一村の世界に限りなく近づき、入り込んでしまうような臨場感だ。その他、近岡善次郎、ギユスター

ヴ・モロー、内海泰、トオヤマ・タダシ、エリック・プロバン、ミレーなどの画家・彫刻家に出会い、作品を通して逆に詩とは何かと問い続けているように思われる。

6

第六詩集『花菖蒲』は二〇〇三年に刊行され二〇篇が収録されている。第二詩集『青のうらみ』の系譜である青い花へのこだわりの詩集である。序詩として次の短詩が掲げられている。「花のくから／ただひとと違わされた／気高くもみずみずしいもの／内ふかい旅がはじまる／ふたたび青い花芯の奥へと／ことはひるみ／ことはまどう／いかとうたおうか／いのちみつる青を／どれほど深めてかえしたらいい／花のくにへ」。その後には詩集題の詩「花菖蒲」が置かれている。古風な題材であるが、大掛さんにとっては自己の文学の原点となったことへの誠実な反復であり、そこから自己の詩的営為を再構築しようと考えていたのだろうと思われる。さらに言うならなぜ自分があやめの青に惹かれつづけているのか、それを深く探究しようと思ったのだろうか。

(略)

私がヘッセのメールヘン『イーリス』と出会ったのは十七歳の花菖蒲の季節だった。アイリスとして花の店のウインドウを彩る、ごく一般的なこのあやめが『イーリス』

の中で壊れやすく稚い季節を、勞わりつつ招じ入れる、神秘的な門を開いてくれたとき、主人公の少年アンゼルムと共に、金色の柱の間を、薄青い路が明るい脈をなしている花菖蒲の花の奥ふかくに、美しい詩魔の眩きを聴き、恩寵の手の煌めき招くのを垣間みただった

長じて成功者となったアンゼルムが、妻にと希った、青い花のように神秘的な女性イーリスは、彼の学識も名誉も財産も幸福も受け入れず、互いに響き合い調和する内心の音楽だけを求め、イーリスという名の記憶にひそむ、かつて最も重要で神聖だった、彼の魂の拠り所を探してきたときこそ妻になろう、と難題を課し、すべてを捨ててそれを探ねる彼の苛酷な旅の途次、青い花のいのちを儂く散り果たす、イーリスの死ののちもアンゼルムは、彼女の魂を求めて旅を重ね、人生の最果てに、少年の日の、花菖蒲の花芯の秘所にたどりつく

私もまた、アンゼルムの苦渋の旅を遙かに生き継ぎ、花菖蒲の青い花芯を覗きみた、繊く脆い青春の日を抱えたまま、果てしれず、酷暑の夏を喘ぎめぐった、ふいに、清澄な秋の横顔を捉えたとき、爽やかな鼻梁と、深い眼差しの翳から、呼び招き促す季節が、光のように身を包んだ、それは、あのとときの波模様をしたさまざまの青さを展

げ、立ち並ぶ、黄金の円柱に導かれた、巨大な花蓋の中、花菖蒲の永遠の内ふかく、創造の呼びかけであり鍵である、神秘的な門を開け放ち、古びた来歴を軽々と抱き入れて、歳月の塵を洗い流した

イーリスの声ともわかぬ、詩魔の豎琴が掻き鳴らされる中で

(「花菖蒲」より)

「花菖蒲」の青い花は大掛さんにとって、青春そのものであり、「魂鎮めの青さ」での反復であったろう。しかしその青は「いのちみつる青」となって内部から甦ってきたのだ。四月の散り逝く桜花から五月のあやめの青花への時間は、大掛さんにとって命の甦りの瞬間であり、「内ふかい旅」への始まりなのだ。そして「花菖蒲の永遠の内ふかく、創造の呼びかけ」であるとも言い切る感受性がこの詩をある種の靈感さえ感じさせるへことばの数珠玉に転化させている。言葉のつながりが、いつしか青色でキャンバスを埋めつくしてしまふような、息の長い筆致のエネルギーを感じてしまふ。前詩集の絵画に拮抗させた詩篇の手法の総仕上げのような詩である。大掛さんは詩と散文の間を開拓しているのだろう。しかしその散文詩篇には豊かな詩的精神が息づいているのだ。

7

新詩集『桜鬼』の装丁は、先にも触れたが画家山本蘭村さんから大掛さんが四十年前に詩集を作るときにこの絵を使っていたと託された三面の阿修羅像だ。正面の意志的で鋭い視線をした女性像、右の穏やかで理知的な女性の横顔、左は闇の中にほのかに輪郭だけ滲んでくる菩薩のような顔だ。人の心に潜む鬼と理知と菩薩の三面が描かれていて、自己の内面の奥底を知られてしまったような驚きがある絵だ。大掛さんはその絵を四十年間温めてきた果てに、その内奥に住み着いたものを「桜鬼」(はなおに)と名付けたのかも知れない。『桜鬼』の三部作も優れた作品だが、私は次の「阿修羅像を作った男」にも心惹かれ、大掛さんの持ち味を発揮した傑作ではないかと思われてくる。大掛さんは父と夫の死を乗り越えて二人の生き方を背後に滲ませて千福という青年を創作した。そのストーリー性や端正な筆致は短い生を真剣に生き抜いた人間への追悼であり、千数百年を経た後も変わらぬ賛歌である。この詩を読んで大掛さんは優れた短編小説的な散文詩をこれからも書き上げるだろうと思った。

天平五年(七三三年)正月、光明皇后は、生母橘三千代夫人(藤原不比等夫人)の死を悼み、興福寺西金堂の建設を発願、落慶まで一年間の一大プロジェクトが組まれた。延べ五万五千人の工人が動員され、釈迦三尊像、十大弟子像、八部衆像など二十八体の群像の造仏も同時進行さ

れ、阿修羅像も八部 衆像の一体として誕生する。(略)

「わたしに造らせてください」

涼やかな声が末席の端から響いた。仏師將軍万福の子千福だった。十七歳の少年が父親譲りの伎倆で、既に何体かの造仏を果たしているのは周知だったから、

「千福か、策を述べよ」

小野牛養にうながされ、少年はほっそりした姿態で立つと、曇りない双眸をひたと上司に向けた。

縷々と千福の描き述べる仏像は、誰も想像し得なかった姿の出現を予感させ、小野牛養は、少年の感性とわざと賭けてみようと思ふと深く頷いた。(略)

「阿修羅像は仏師千福に生写しよ」

と人は噂しあったが、この像がその後、幾たびかの火災をくぐり逃れて千三百年の時空を生き抜き、世界遺産の名像として人々を魅了しつづけることを誰が予想し得ただろうか。(「阿修羅像を造った男」より)

歴史には名を残していないが、歴史を担い大きな仕事をした無名の民衆を、桜花やあやめの青花を愛でるように、大掛さんはその行動の目撃者としてその奥深い情熱を想像力で書こうと、これからも静かな情熱を傾けていくのだろう。

最後に「桜鬼Ⅱ」の詩を引用してこの論を終えたい。大掛さんが生涯かけて探究しようとしている桜は、いまだ決着が

ついていない。いや決着などつくわけがない。それは西行から連綿と続く桜への感性に寄り添い生きることだからだ。大掛さんは「行き着く所を知らぬ相逢の魂が／鬼となつて桜に棲みついてしまった」と語っている。その意味で大掛さんは桜に寄せる恋情を生きている詩人としかいいえない。父の文学的な課題を背負った一人の女性が書き続けるためには、桜の存在、鬼のような存在、その両方を抱えて新たに出現してくる存在を三面の阿修羅像として心に深く秘めなければならなかったのだ。

この歴史や伝統に血を通わせて肉化していった『桜鬼』の達成を、桜に魅せられている多くの人たちに読んで欲しいと願っている。またこの詩を含めた大掛さんの詩篇を、過労死の可能性のあるビジネスマン達にも、詩的・芸術的才能を抱えながら、そんな環境を作れない鬼を抱えた女性達にも読んでもらいたいと願っている。きつと桜色と青花のへことばの数珠玉が多くの困難を抱える人々に生きる勇気を与えるだろう。

桜鬼Ⅱ

花に染む心のいかで残りけん
捨てはててきと思ふわが身に——西行

ここ吉野山奥千本の桜が夜闇に沈んだ

先刻までの花見の人影は途絶え

座像の私はおもまなこ瞳いたまま闇を凝視している

西行庵と人のいうこの草庵をめぐる巨桜たちの影

なだれる花房がいましも光を帯びはじめ

しろじろと花枝を濡らすのは弓張の月の雫

「義清」

花の中から降ってきた顔きを

しばらくは風の声だとわが耳は捉えた

「義清、来ているのですよ、ここに」

懐かしく甘美なものが声となり形となつて

花の襲を押しひらき抜け出てくる

北面の武士 佐藤義清を召された過ぐる日の

三条京極第が月光に浮かび上がる

「待賢門院さま、出離ののちも、女院への煩惱断ちがたく、

吉野に籠もった私でしたが、花染めの心は、なお千年の歳

月を彷徨うて安らぎませぬ」

「義清、桜がみちびいたひと夜の契りは、千年どころか、

この世の滅ぶまで果てることはないのです」

花の中から訪れた貴やかなものを
ひしと掻き抱きながら

座像の私にはわかつていた

行き着く所を知らぬ相逢の魂が

鬼となつて桜に棲みついてしまったのを

花鎮めのひと節など気安めにすぎぬ契りの重さゆえに